



Title	表象としての〈木戸孝允〉：イメージの一五〇年史〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高橋, 小百合
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15994号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92383
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sayuri_Tsuchiya_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）氏名： 高 橋（土 屋） 小 百 合

学位論文題名

表象としての〈木戸孝允〉——イメージの一五〇年史——

・本論文の観点と方法

本論文は、歴史とは語りであるという認識のもと、歴史的考察や政治評論的言説を参照しつつも、木戸孝允を語る言説は、単に木戸孝允への評価のありようを示すものではなく、〈木戸孝允〉を明治維新とそれに始まる近代日本史が孕む問題系を象徴させて再生産しつつける営為であるにとらえる観点を提出する。そして、通俗的言説や大衆向けの読み物にも目をくばり、表象としての〈木戸孝允〉を通してどのような大衆的な欲望が語られているのか、あるいは、〈木戸孝允〉について語ることによって、維新史、もしくはその後裔である語り手の〈現在〉に何を求め、何を見出そうとしたのかを考察するものである。西郷隆盛や大保利通と並んで「維新三傑」と呼ばれた木戸であったが、西郷や大久保のような個性的な物語が付与されず、時代や立場ごとに揺れ動く木戸像の造型から伺うことのできる幕末維新史の語りの諸相を明らかにする。木戸の造型の変遷を文化史的に辿り直し、維新以後のひとびとにとって維新とは何だったのか、維新史の語りに何を託してきたのかということをとらえ直すことを目的にしている。

・本論文の内容

本論文は、序・全八章・結から成り、木戸孝允の表象の変化および変容を通じて、明治一〇年代から今日までの、幕末維新史をめぐる認知と語りのあり方について通史的に考察をすすめる。

序において、本論文の目的と方法および構成が示される。かつてさまざまな創作物において「志士の代表」として颯々たる風韻に彩られていた木戸孝允が、司馬遼太郎以降、スター性を剥奪されて地味な脇役に追いやられたという、木戸の造型に関する〈イメージの変容というイメージ〉の存在を指摘し、これが果たして木戸孝允像のこれまでにについて妥当な認識であるのかという疑問から、本論文は出発する。

第一章では、こうした現在一般的に浸透している木戸孝允のイメージと、そのイメージが含有する今とは異なるかつての木戸孝允像について分析する。そのうえで、木戸孝允像の受容史について先行研究を参照し、現在における同研究の進捗と内容の概括を述べる。

第二章においては、ある時期までは語り手の立場や発表媒体ごとにさまざまに変化し、拡散していた木戸孝允のイメージが、愛妓幾松を置くことで彼の個性を遺憾なく表現する記号的場面（美妓を間において捕吏と対峙するという）を獲得し、木戸孝允像はここから政治的文脈の探究と表象を半ば放棄して、〈志士・桂小五郎〉としてのイメージを流通させたと述べる。その嚆矢が、木戸孝允の在世中に催行された芝居「近世開港魁」であり、そこから明治末年までの活字媒体や錦絵に登場する木戸孝允像の特徴を探る。維新の創業から守成までの時代の変化、また表出者の立場の違いに応じて、さまざまに派生し、拡散するイメージと、一方でそれらを収斂し、〈木戸孝允〉の〈個性〉として立ち上がろうとする典型化されたイメージのゆるやかな交替の劇をみる。

第三章は、明治後期から大衆読み物世界における幕末の騒擾劇中にさかんに登場するようになった「勤王芸者」に注目し、「恋」を語る文脈が、同じ文脈において維新をどう処理するのか、またその語りは維新の受容史をどのようにふくらませたのかについて、検証・考察する。そして、木戸と幾松は、人情本の心中とも、近代的恋愛とも重なりつつずれており、近代にも前近代にも回収しきれない名づけようのない関係性を示していると述べる。

第四章では、幾松像の形成と変容の背景として、「恋愛」をめぐる言説における、芸妓から女学生へのヒロイン交替劇に着目する。知と性的魅力を兼ね具えた〈新しい女〉、〈「恋愛」しうる女〉としての芸妓の後継、あるいは対抗勢力に「女学生」を想定し、両者へのまなざしの近似と差異、また

それらの先にうまれた「恋愛」の〈その後〉を語ろうとする言説について論じる。

第五章は、昭和期、敗戦までの二十年間に発行された活字媒体中の維新と〈志士〉の像を追う。昭和前期は、いわゆる「髷物」としての表現、文脈に、維新（史）が取り込まれていった時代であった。本章では特に大佛次郎『鞍馬天狗』シリーズをその例として、通俗的読み物における〈志士・桂小五郎〉の造型の特質を明らかにしつつ、維新（史）観の変容のさまを読み解いていく。比較対象として、この時期拡充されつつあった、近代歴史学の方法に則った史料研究型の伝記にも言及する。

第六章では、木戸孝允が登場する映画作品、および映画化された小説作品のうち、大正期の発表作から『燃ゆる渦巻』、昭和の敗戦前から『剣風練兵館』、戦後から『桂小五郎と近藤勇 竜虎の決戦』を比較し、論じる。典型的な〈志士・桂小五郎〉像を描く『燃ゆる渦巻』と、〈モラトリウム〉時代の木戸に焦点を当てたことで異色の作ともいえる『剣風練兵館』、戦後における〈世直し〉的維新観を示す『桂小五郎と近藤勇 竜虎の決戦』は、いずれも敵と戦うストーリーではあるが、木戸孝允の性格描写と行動論理、また敵の性質にそれぞれ異なった特徴がみられる。ある人物や勢力を敵と見なすための指標、すなわち正義の論理にまつわる三様の描写をふまえ、エンターテインメントにおける表現の典型が、幕末維新史をいかに語ってきたかを論じる。

第七章は、司馬遼太郎作品が描く木戸孝允像について述べる。木戸孝允のイメージは、「髷物」全盛期の晴ればれしさから、現在では「地味」で功績不明な、あまり芳しくない趣に凋萎しており、その転換点は幕末維新期を舞台とした一連の司馬遼太郎作品群にあるといわれている。本章では、「逃げの小五郎」（『幕末』）、『世に棲む日日』、『花神』、『翔ぶが如く』『竜馬がゆく』などの作品ごとに登場する木戸孝允の造型を分析して、前述の通説の妥当性を問う。

第八章は、司馬遼太郎の一部作品の下敷きになったとも思われる、木戸孝允について批判的な言説群の検証をおこなう。それらの言説がキーワードとして語る木戸孝允の（おもに政治家としての）瑕疵に関する表現は、司馬作品にも踏襲されているが、一方で各々の言説の文脈や表出者の立場を勘案すると、おなじ語でも司馬作品のそれとはニュアンスが異なっていることを指摘する。

結において、本論文において得られた知見の全体を総括し、今後の展望を示す。